

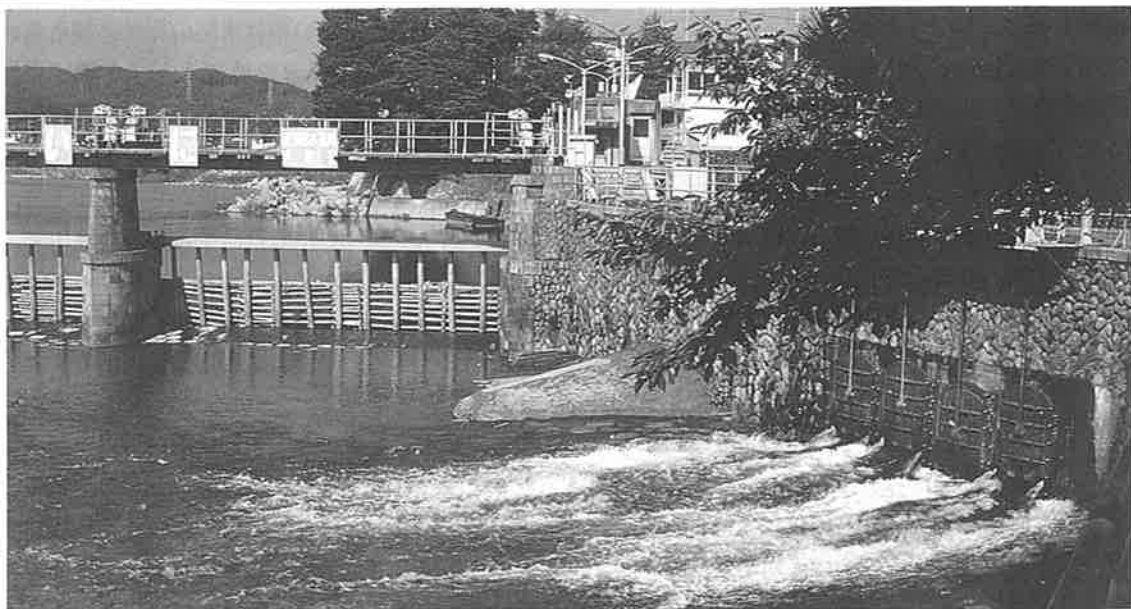
財団だより

多摩川

1992・12 第56号



アユ（アユ科）
多摩川を代表する魚。春に海から遡上、中流部の砾礫底に産卵する。



■多摩川現風景■

(12) 羽村堰の年間通水

秋から春にかけての8ヶ月間、羽村堰から下流は水の流れない状態が続いていた。とくに冬場の渇水期にはわずかばかりの伏流水が細々と流れ、あわれな姿を呈していた。秋から春にかけては、下流の農業用水への放流が不必要なことから、上流の水はこの時期全て水道用水として取水され、玉川上水へと送り込まれていた。それが、今年の秋から毎時7,200トンもの水が放流されることになった。これだけの水が常時流れるのは70年ぶりのことだそうで、下流の水環境の改善や生物相、景観に与える影響は大きい。それにも増して、羽村堰下が水しぶきを上げているのを見るのは気持ちがいい。

流域市町村からの要望が東京都に対して強く出され、東京都の水事情が好転したことを機に実施された。

多摩川への年間通水が始まった羽村堰（平成4年10月撮）

川の川らしい最大の要件は水がきちんと流れていることに尽きる。水道用水として多摩川の水が貴重な存在であることは言うまでもないが、このことが多摩川の水環境や水利システムを考えるきっかけになれば幸いなことである。

● 関連する財団の助成研究（No.は報告書番号）

<学術研究>

- ①多摩川中流域における水質の動態に関する水理学的解析
1981年 河原能久 長岡技術大学 No.51
- ②多摩川における水魂の挙動を支配する水理条件とその評価
1985年 廣沢佑喃 東京大学 No.86
- ③多摩川水系の汚染と自浄作用に関する総合的調査研究
1985年 近藤典生 進化生物研究所 No.78

<一般研究>

- ①多摩川上流域の陸水学的研究
1989年 角田清美 No.62

多摩川散歩

● 陵北大橋から源流まで

八王子ランドマーク研究会 鈴木 泰

11月半ばのある日、前回に引き続き陵北大橋から浅川源流を目指して上流へ向う。歩きだす前にちょっと寄り道して陵北大橋の上に立つ。東に遠く八王子のまちなみを望み、見下ろせば左側から流れてくる浅川本川に山入川が合流している。西に遠く見える陣馬山麓が今日の目的地だ。

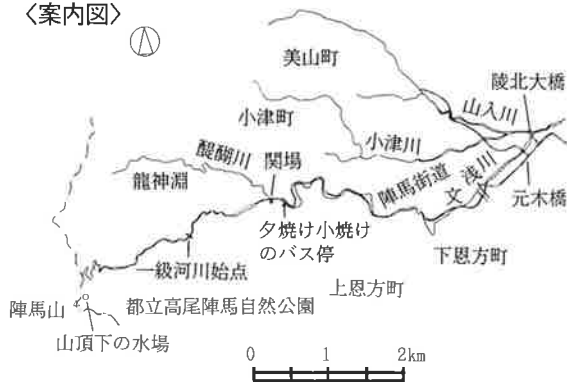
橋から再び陣馬街道に戻り、小野田の三又路を右へ道をとる。美山町、小津町の採石場へ往復するダンプカーがひっきり無しに通る道を5分程歩くと元木橋。橋の手前を左へ曲ると、簡易舗装の河川管理用通路が右岸添いに続く。川幅も下流に比べると半分以下の50m位だろうか。堤近くのスクラなど樹木も多く、雑木林を巧みに生かした公園などもあって紅葉が美しく、澄んだ水にハヤの魚影の見える川面には、カルガモのつがいやキセキレイも姿を見せている。好天にも恵まれて心地良い散歩道であるが、ここは浅川でただ一ヶ所、川添いにフェンスのある所でもある。橋を除けば全く切れ目なく数百メートル続く。やがて陣馬街道を河原宿橋の手前で横切り、もう一本広い道を越え、民家の裏のような所を通って深沢橋という小さな橋を渡る。やっとフェンスが終わって、道は川添いの良く手入れされた杉林の中を行く。庚申塔が見えてくると恩方第一小学校前が出る。右手に小学校を、左手に川と大きなケヤキ、竹林を見ながら道は再び陣馬街道と合流し、一路上流へ向う。

ケヤキの落葉が音を立てて水面に散り、にぎやかな彩りを見せているが、もう川はずいぶん下のほうを流れるようになってきた。山も近くなり、所々で流れが山裾をかすめるようになり、水田や畑へ果樹園が点在している農村らしい風景とともに、川も自然の様相を見せはじめている。紅葉した雑木林や緑深い杉林を街道添いの民家の切れ目から身近に感じながら歩く。ここ恩方の杉材はか

つて東京都内の電柱用材のほとんどをまかなっていたと聞く。今は間伐も行なわれず、林床も荒れた所が多いのが気がかりである。恩方中学校を過ぎて駒木野の集落は旧家が多く立派な建物が多い。テニスコートやりんご園の看板が目につく中、いくつかの橋を渡るたびに道は右岸、左岸と移っていく。ケヤキ、オニグルミ、カエデ類などの広葉樹が川岸に多いのは水防のために植えられたのであろうか。狐塚を過ぎると“夕焼け小焼け”のバス停留所がある。童謡の作詩者中村雨紅はここ上恩方の出身である。まもなく川も道も二筋に別れ、恩方第二小学校の前から左、案下方面に向う浅川本川に右から合流するのが醍醐川で、水量はこちらの方が多。またこの奥には竜神淵と呼ばれる深い淵があって古くから雨乞いも行われていた。ここは陣馬街道の口留番所の置かれていた所である。

街道添いに民家の点在する川添いの道を左へ。車では狭く感じる道も歩くと広いが、傾斜はきつくなってくる。道は谷に添って曲がりくねり、遠く木の枝越しに見下ろす川はもう溪流である。見上げると陣馬山も近い。小さな橋の傍らに色あせた河川名の表示板が立ち、「一級河川浅川」と書いてある。ここがとりあえずの目的地で陣馬高原下のバス停留所までもうすぐだ。今日はここから引き返すこととしよう。しかし流れはまだ続いている。浅川は道を登りつめた陣馬山頂直下において、登山者の喉を潤している小さな湧水に始まっているのだろう。

〈案内図〉



私と多摩川

一年中、野川

小金井市わんぱく村 若竹キミイ

多摩川は大きすぎて、直接遊ぶには手ごわい気が先立つ。私の遊ぶ相手は野川。でも想えば野川との遊びは、昔農工大の学生グループに誘われて多摩川へ遊びに行った日に始まる。

子どもたちがまだ稚なく、おそろしく寒い朝だった。是政橋あたりの河原を歩き、ブルブル震えながら野鳥の姿を追った。干潟のようになった岸边に小鳥たちの足跡が可愛らしかった。

細長く切ったボール紙を輪っかにして足跡のところに置き、溶いた石こうをトロトロと流しこむと、ほどなく固まる。ポコンと剝がして盛り上がった足跡型のできあがり。チドリのをもらった。眺めるほどに、妙に生々しい盛り上がり、直接に鳥の姿を追うのとちがった親しみを感じる。

また初夏の一日、草花ウォッチング。「河原の植物は流れがいろいろ運んでくるので、種類が多いですよ」と説明される。群れている草花たちのまん中に位置を決め、自分で360度回ってみる。目に入る植物すべて、名前を知っているかどうかに関係なく数える。44種数えられた。知的な野遊びたァこういうのかと思った。

毎年5月、中前橋の下で水質測定の際に360度見まわす草花ウォッチングをやってみる。ずっと22種だ。多摩川の半分しか種類がない。22種の中身は変化している気がする。イネとかムギの仲間、つまり牧草のような葉っぱのツンツンした連中が多くなり、葉の広い仲間が負け気味だ。どうしてか分からないが、草を刈る時期や刈り方に多少影響を受けているとは思う。ある草花にとって、実を結ぼうとする前にバリバリとやられればアウト、その次に実を結ぶ草がラッキー！とばかり仲間を増やす。また、概して多年草、宿根草の勝ち。

毎日、親しむ者にとって、この川沿いはすでに公園みたいなもの。季節毎にいろいろ楽しめるのがよい。ここを管理しなくてはならない側は、千差万別の好みに応えるのも難しかろうけれども、この秋、美しい秋草が元気に刈り進められるのが無残で、その気持ちを電話したら快く応じてくれた。「まだまだススキもこれからだし、紅く染まる草を楽しみにしている人も多いのです。せめてところどころ刈り残すことになっている水際の部分を大きめにとって、それから公園に接しているあたりは、最後の作業にして……ください。」せめてものことだが、心なごむ秋草の景観がいくらか残されて、やはり嬉しい。お月様もカモたちも嬉しかろうし、冬越しの虫たちも助かったにちがいない。

年を追って私の楽しみは具体性を帯びて少しずつ、増える。春はスギナとミントの葉を紙袋に2つ摘む。これはハーブ・ティ、庭の竹とブレンドして、心休まる不思議なお茶ができる。もの本によればこういうお茶は肝、腎等の臓物をえらく活性化するらしい。ダイエット効果は夢のよう。ハーブ・バスもなかなか。のびるを味噌に漬け込む。仕事量として、味噌1kg位が私の適量。梅雨の前にドライフラワーを大花瓶に一杯つくる。余分はわんぱく夏まつりの資金源にする。夏の盛りに欲しいのは、大きく育ったヨモギを一山。これは、わんぱく夏まつりで作る小屋の屋根葺きに使う。香りの良い小屋で一晩泊まる。この一晩は魔女。あと、四季折々の天プラ、佃煮やケーキにしたり、薬草も目にとまっているが、手がける時間がない。

この頃でできた欲がある。立派なお婆さんになる頃……もうじきのことだが、野川の魚で目刺しなんか不自由しないサ、なんていいなァ。

よみがえ

甦れ！多摩川

■ 丸子川に行く

山道省三

世田谷区大蔵の世田谷総合運動場脇から急坂を下っていくと、仙川にぶつかる。その下流約500m所から国分寺崖線に向って小さな水路が流れている。水路の入口には「きしべの道」とあり世田谷区による水路整備が行なわれ、崖線のハケと呼ばれる斜面線地といっしょになって市民の散策路になっている。

この小さな水路は、かつて六郷用水として開削された農業用水路であり、開削者の名前をとって次大夫堀とも呼ばれている。そして現在は多摩川水系の一級河川丸子川として世田谷区が管理している。六郷用水は慶長14年(1609年)に、15年の歳月を経て完成され多摩川左岸の世田谷領14ヶ村、六郷領36ヶ村に配水され約1500町歩(1500ha)を灌漑した。従ってもともとは、丸子から下流の太田区一带の灌漑が主な目的であったとされる。そして取水口も狛江市和泉の多摩川から取水され、野川や仙川、谷戸川といった川の水やハケから出る湧水もあわせて流下していた。現在、この流路のあった世田谷区喜多見には旧水路を復元し、民家園や水田もあわせて計画された区立の次大夫堀公園がある。

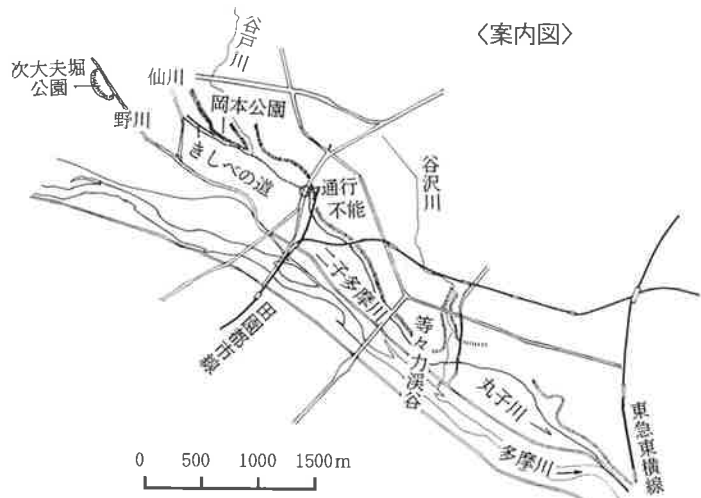
堀の名前となった小泉次大夫吉次は、江戸初期の土木家で多摩川の改修事業や対岸の二ヶ領用水の開削を行なったことで知られる。

仙川から分かれる水路を辿っていくと、素堀の水路に水草が繁茂し脇に散策路が整備されている。わずかばかりに流れる水は、所々でハケからの染み出し水を集めてはいるものの、家庭排水とおぼしき水も流れ込んでいる。

岡本公園や静嘉堂文庫のある

緑地帯となっているあたりは住民の散歩のみならず、休日には史跡や公園めぐりの人達が多く集まってくる。しかし、谷戸川を合流する岡本2丁目あたりから、瀬田、上野毛を経て、等々力溪谷をつくる谷沢川までは、いわゆる三面張の水路で湧水も見られない。ところが薄暗い水面をのぞいて見るとカルガモやコサギが遊んでいる。ハケの斜面地は高級住宅地としてすでに開発されているものの緑量が多く、水路と一体で整備したら京都の哲学の道なみにはできそうな気がする。

谷沢川の合流点から尾山台1丁目あたりは護岸に自然石を貼ったり、橋の架け替えを行ったりして、景観や自然に配慮した工事がなされている。また、丸子川と谷沢川はもともと立体交差する川であった。今では合流し多摩川へ流れ込んでいる。そのかわり、谷沢川の水をポンプアップし丸子川の維持用水としている。そして、所々古い桜の木があって昔の名残りをとどめている。流れは、田園調布の多摩川台公園の下を経て一部は暗渠となって東急東横線の鉄橋から100m程下の樋門から多摩川へ流入している。約7km程の丸子川を下って感じることは、この川は湧水を集めるといい川になるという予感であった。世田谷区は環境整備の事業をできる所から進めているが、ぜひ湧水を生かして、ハケと一体となった歴史的景観の再生を望みたい。



《 “多摩川およびその流域の環境浄化に 関する調査・試験研究” 募集 》

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってきました。既に273件の研究に対して助成金を交付し、211件の研究成果を得ることが出来ました。

平成5年度も引き続き首都圏における「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究」を下記のとおり募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

- (1) 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
- (2) 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
- (3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査、試験研究
- (4) 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復もしくは環境創造に関する調査、試験研究

公募締切日 平成5年1月18日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号(渋谷地下鉄ビル内)

電話 (03)3400-9142 (財)とうきゅう環境浄化財団

年度別助成件数・助成金額

年 度	研究区分	助成件数			助成金額 (千円)
		新規	継続	計	
昭和50年度 }	A類	119	118	237	372,713
	B類	59	41	100	41,011
	計	178	159	337	413,724
昭和61年度	A類	6	20	26	45,851
	B類	9	9	18	11,585
	計	15	29	44	57,436
昭和62年度	A類	9	15	24	42,704
	B類	6	12	18	9,932
	計	15	27	42	52,636
昭和63年度	A類	10	13	23	24,878
	B類	4	10	14	11,167
	計	14	23	37	36,045
平成元年度	A類	8	12	20	38,652
	B類	3	5	8	9,334
	計	11	17	28	47,986
平成2年度	A類	10	11	21	37,614
	B類	6	5	11	10,666
	計	16	16	32	48,280
平成3年度	A類	8	15	23	32,162
	B類	6	6	12	7,861
	計	14	21	35	40,023
平成4年度 (10月末現在)	A類	7	14	21	37,394
	B類	5	9	14	10,544
	計	12	23	35	47,938
合 計	A類	177	218	395	631,968
	B類	98	97	195	112,100
	計	275	315	590	744,068

※ A類は学術研究、B類は一般研究

寄贈文献の紹介

● 「エコロジカル・デザイン」

いきものまちづくり研究会 編著 1992年

綱ぎょうせい 発行

「いきものと共生するまちづくり ベーシックマニュアル」の副題のごとく、生物生存の基本的な原理・法則をとらえ、環境保全・創出、環境整備の方法を解説している。

● 「きれいな水をとりもどすために」

小倉紀雄 著 1992年

あすなる書房 発行

「市民環境科学の誕生」と副題がついている。著者の専門的立場から“水”についてやさしく解説するとともに、市民参加の身近な河川の調査方法等を解説している。

● 「地下水の世界」

榎根 勇 著 [651] 1992年 NHKブックス

過去30年間地下水の研究を続けてきた著者による地下水から見た分かり易い環境論

第6回 「多摩川実査」を終えて

10月30日、財団主催による第6回「多摩川現地実査」が行われた。研究者、選考委員、行政関係者、財団職員が実際に多摩川を見て、その時々テーマを語り合う、いわば「多摩川フィールドワーク」で「多摩川勉強会」といった活動である。今回は多摩川の「堰」や「魚道」を勉強してみようと計画された。今年建設省は「魚がのぼりやすい川づくり推進モデル事業」に多摩川を指定した。河川における人工的な施設である「堰」をいかに魚にやさしく接するようになるのか、河川の自然環境を考えるのに大変重要なことである。そこで実際に現地をみて考えようというわけである。

多摩川本流の8つの「堰」を上流から下流へ羽村取水堰 → 昭和用水堰 → 日野用水堰 → 四谷本宿用水堰 → 大丸用水堰 → 上河原堰 → 宿河原堰 → 調布取水堰と見学することとした。実査となると毎年雨である。前日まで雨が降って心配していたが、当日の朝良い天気になりほっとした。小雨でも野外での実査は愉快ではない。10時にマイクロバスで羽村駅を出発して羽村堰に向かう。羽村堰では水道局の方に、現地で説明を受けた。今まではせき止めた水を5月から9月まで放流していたのを今年から一年中放流するようになったそうだ。今まで放流の無い時期は羽村の堰から昭和用水堰までは殆ど川の流れがなかった。堰の下で釣人が糸をたれているのを見ると、当たり前のことであるが川は水が流れて始めて川であると思った。堰の使用目的がそれぞれ農業や上水道のためであるため、魚道については魚の立場に

たって考えられていなかったのではというのが率直な感想である。「魚がのぼりやすい」ということはいったいどういうことなのか、一つの課題であろう。8つの堰は次のようである。

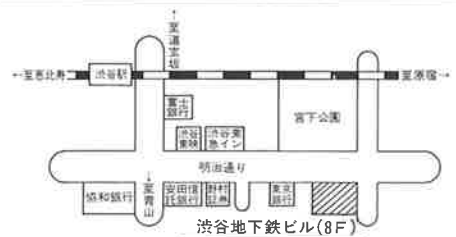
名 称	使用目的	魚 道
羽村取水堰	上水道用水	—
昭和用水堰	農業用水	○
日野用水堰	農業用水	○
四谷本宿用水堰	農業用水	—
大丸用水堰	農業用水	○
上河原堰	農業・工業用水	○
宿河原堰	農業用水	○
調布取水堰	上水道用水	○

※国土開発調査会資料より

それぞれの堰について建設省京浜工事事務所、川崎市土木局、東京都水道局の方々の丁寧なご説明をいただき有り難うございました。車中、研究者の方々から、それぞれのテーマによる研究報告があった。「昔日の多摩川の古図会での説明」、「河川魚類の遊泳行動の研究報告」、「長良川河口堰をめぐる自然環境保全上の問題点」、「多摩川における稚アユの遡上生態の研究報告」、「多摩川河口域の塩分遡上と浮遊物質の輸送についての研究報告」。いそがしい一日のフィールドワークではあったが、参加者の熱心な取組みによって実り多いものとなった。行程を終わって自由ヶ丘でおこなわれた懇談会では談論風発まことにギリシャの昔行われたシンポジウムはこのようなものであったのではと思われた。

常務理事 芳村 重徳

- ・発行日 平成4年12月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125

※前号の私と多摩川の執筆者は、「小山典子」さんではなく「小山信子」さんの誤りでした。筆者にお詫びするとともに訂正します。